

M 85. 1. 1

北海タイムス

(題) 正月

相

▲余が今一度十年前の、父あり母あり妹あり、則ち余が小学校時代の正月をして見て見たいと思ふ(涙淵)▲僕は我國に暦と陰暦と二つ有るのが氣に食ひぬ、加之に曆年度との會計年度だと眞實に不都合千萬である。此のカ之れを改めて算みたいと想ふ。(萬機)▲錢もなく衣類もなくて正月は格別外に心配も無し(職工)▲正月など云ふて老若男女の差別なく浮れ閑るの比決して悪くは無いが退いて吾等青年輩の前途を思へば實は器皿一番せねばならぬ(佐々木)▲僕は毎年新らしい帽子と袴とを着けて學校へ行く時の心持が何となく娘しくて耐へ口(水下)私は早くお正月を立つて勿體無いをためてよ(はつ女)▲正月十六日の収入が待ち遠しいなア(裏松)▲と上げて遊びたい(年生)

▲正月嗚呼正月、正月どきハ云へば我雖は三年前の正月の事を思ひ出す、あの時我雖は彼の人と並んで歌留多を取つて居たことがあつたが其の時の心持つたら無かつた、思ひ出してもソツとする(意中人)▲あい正月程いやなものは無い一休の所謂門松は冥途の旅の一里塚を思ひ出せば世間の人が浮れてあるく氣心が知れない(獨脚)▲正月をさへいへば僕はいつも新婚旅行の當時を想ひ起す(高橋生)

M 86. 1. 1

北海タイムス

松の内の遊戯、雙六、繪合、貝おほひ等は一部上流の奥殿に古の面影を存するのみにて廣く世間に行はれず、上下貴賤老幼打交りて殊に多人數樂と共に優雅にして趣味のあるは歌かるた會に若くものなしとの遊戯は娛樂の中に我邦神ながらの道なる和歌をねねゆる益ありて帝國內至る處、秋の田の御製を知らざるものなきは實に此遊戲の開かるとは何人も疑はざる處なるべし然るに本道に行はる歌かるた會を見るに號れも下の句のみを讀みて下の句を取るに過ぎずして言は、片輪の「かるた」會なり、上の句より讀みて下の句を取ればこそ「かるた」會も面白けれ、下の句を讀みて下の句を取る其間何の面白味のあるべき、又これでは三十一文字の風体韻調をおのづから感得する利益を失ふ道理なり、事遊戯にかゝりて毫も怪む處なき有様を見るに忍ひず一言して優美なる「かるた」會の完成を期せんするになむ。

北澗夕照一山又

一九七九年一月七日造册

必らず一度は問合せ
給へかるた販賣者の大利益



北 海 少 年 1 月 号

(日曆日) 一九五一年五月三十日

(五) 第四十三百三十四號

T. II. 1. 7

新川旭

木百人一首圓特

T. 15. I. 8

M. 36. 1. 1.

北海ノ冬ス

点あへじて同じ題へ歌
 かるた 爪 蟹廻舍 左文
 入水にす山
 蛙かうたふ歌かるたとて
 散る波はなきさの玉や
 初 鳩 全 同
 鶴にはかりなからも
 屠蘇湯哉
 羽 子 全 風來坊 柳花
 門松に寐れて奥こもる
 つるの羽子

M. 39. 1. 1

歌加留多（應算數二百二十八句）

選外

遙へば人眼に月雪花の

札幌

浮名散るかどらたかるた

札幌

去年は戦でかけたる君の

同

交ツて目出度どるかるた

川

すいた同士が取る歌かるた

江別

源平ながらも助けあい

高島

見込みつけたる其人の字を

札幌

思ふれ方の笑顔を見れば

札幌

歌留た取る手も頭へ勝

舟

花のいろ香や月雲愛の

捨小舟

心せり持つ歌かるた

耕竹

負ても悔しくない歌かるた

内

思ひ通りに組んだなし

月の栄田等

ふみもならぬ小式部同志か

親鑑州

顔を報らめ押へた札も

走

遊びも罪でき歌かるた

親鑑州

物を思ふといふかるた

素

しあしめん乙女の姿

子

懲りぬて歌かるた

産

勝負重なる手と手が様の

樹

糸を縫つる歌かるた

高嶺

粹な人ても不粹に手出し

美の浦人



△
煙火に顔てら／と歌留多哉
歌がるた伶り難き女哉
よき人組みかる歌牌に貰ひけり
越後に一會中に一人の美僧あり
光氏の紫なぶるて手繩を哉
发禪の袖を抱へて手繩を哉
下京や子供喧しいのす
よい東風が吹くと帆が上る
川に向三つ四つ日は暮れて暮
左義長や村にも今日の夕程
朝風や燃上る火の吉普揚
城脚の練兵場の左義長哉
左義長の旗立てば退く群衆哉
初東風や牛車遙かな燈籠の道
海折て土橋渡れば初東風や
初東風に伊勢より荷船着に行
初東風や入江や々の等船
春駒に伊勢屋の小僧一す惚
古り山でたる小路哉
春駒の金落しりり舟町端れ
者駒やさざめき集ふ町端れ
初に傳承の刀の聲しけり
大海に現を洗ふ試算哉
兄上によ者水は吾汲み候
月を墨塗られけり珠が顔
門の松背の大松翠なり
君がよ代の石もならず手の眞

北海タイムズ

卷之三

歌謡留多
天勝を讀つた心を酌んで
われても末次の送り札
市余 牧蠶

狂舞手前にさせられ
じと暫かるたの敵味方
小梅荒浪

主の雄々しさに動き振に
そつこは笑歌がるた
札幌桃六

秀逸者者の娘子軍に、札幌川藤子
待てぬましに乙女の姿を見て懸は
監禁多會札幌一一笑
主の味方の形勢となり歌謡留多讀
へばはづむ息に發丹古城

参考資料 6

明治大正時代のかるたに関する記事

明治 36 年 1 月 1 日 (木) 北海タイムス

正月の遊戯 もする

場所變れば品變る、牡丹餅變れば粉變る、浪花の芦も伊勢の濱荻といふから、國々で遊戯の變るのは當然である、於正月の遊戯として全國一般に行はれて居るのは百人一首の歌留多遊び、紙鳶、追羽子などであるが是等は大抵世人の知つて居る遊びであるから夫以外に鳥渡興味ある遊戯を紹介して正月の於慰みの御参考に供する事としやう・・・・・・・

明治 39 年 1 月 5 日 (金) 北海タイムス

○ 初試合 (道場破り)

雪に榮たる門松の、緑に映る天津日の影、曇らぬ御代の瑞祥は、注連に結びし伊勢暇の、目出度く毛とにも知られたり。凍りて白き冬の空を薙ぎて、扉の隙間もる風の寒さに領を窄め、殘んの埋火搔櫈けつゝ、まだ覺めやらぬ初夢を繰返すにやあらむ、あるは又、昨日ひと夜を歌留多遊びに打興じ給ひし姫御前の、乙女の姿あられもなう、亂れ始めたる黒髪握りしめて「あってよ」とばかり寝言たまふ頃なるべし、衢の軒は尚ほ最と静に、人煙立ちも昇らぬ今日正月三日の朝まだき、・・・・・・・

明治 39 年 1 月 8 日 (月) 小樽新聞

歌かるたの利害 (三輪田元道氏の談)

▲ 日本は非遊戯國、元来日本は非遊戯國なり男性の遊戯としては圍碁将棋より弓馬の道に至るまで多々ある如くなれど概して室内的なり、室内的なる故に活動の世の中に適せず漸時衰滅の状態にあるは自然の勢いと云ふべし▲之に代れる遊戯が未だ多からずよしやありとするも學生間位に限り一般社會に及ばず為に一般社會は娛樂の道を飲酒遊興の方に用ゆるに至り殊に冬季は生理的要より酒によるの傾なきにあらず▲此外の正月娛樂としては歌かるた、花合せ等にして就中歌かるたは全國一般の男女を通じての遊戯とは云ふべきものにて西洋流に云はゞ或は無邪氣ならむやも知れずと雖も教育的また風俗的に考へ来るも弊害は多きが如し▲第一は夜ふかしの〇にあり歌かるたには晝の曾なるもの稀にして概ね夜のものなり此の點に於て生理的に睡眠不足不秩序等の惡結果を招ぐを免れず或は正月の如き遊食期には何等の運動なからべからずと云ふものあれど元來正月は遊食するもの否多食するものとの習慣から悪し▲第二は歌の意味に戀歌多き弊害あり少年少女等は素より何等も分からざる可く又歌の意味としても「まだ文も見ず天の

橋立」の如きは歴史上戀歌にあらざるべけれど浅薄なる考と一種の野心とを以てすれば或種の偶意とならざるにもあらず斯くしては恐らくは幾分の弊なきを得ず▲第三は男女混合の弊なり男女混合は學校教育等に於て否認されつゝありながら遊戯も遊戯而かも夜間遊戯に於ての男女合併が是認されつゝあるも妙なり必ずしも之が弊害なりとは云ふ可らざるも又弊害なしとは云ふ可らず▲されど他に適當の遊戯なしとせば西洋のクリスマスの時の遊戯の如く單に男女と云はずして老幼男女の合併即ちいくつかの家庭が總集合して晝間に於てかるた遊びをなすことはなりかくの如くんば歌かるたも亦比較的健全なる遊戯の一たるを得ん平云々

明治 39 年 1 月 10 日（水）北海タイムス

春遊びの注意

本道の冬季は雪の爲寒さの爲人は兎角外出を厭ひこれが爲に若きものは歌かるた中年以上の人には弄花などに浮身を費すもの多き弄花の害は今更云ふ迄もなき事なるが歌骨牌の方も亦往々にして以外の弊を流す事珍らしからず○も○も歌かるたの曾なるもの年若き男女相交はりて晝夜の別なく戯れ興するを例とし青年男女の情合多く歌留多の媒介に依るもの寡なからず歌留多曾にして一歩を進めば危険なる彼のザコ寝の醜態にも増しぬべし或る覺者の説に依れば異性間の皮膚の接触は两者の情交を成立せしむるに尤も偉大なる力を有すと云ふかるたとりに膝と膝をつき合はせ手と手を觸るゝの機会多きはこれやがて○の弊害の伏在する恐るべき門戸なれば若き男女の父たり兄たる人は一般社會も亦かるたとりの弊害に就いて充分に注意を加ふること肝腎なるべけれ

明治 40 年 1 月 19 日（土）北海タイムス

雪中娛樂法（其三）○かるた 農學士理學博士 松村松年氏談

第二に雪中の娛樂として骨牌を獎勵せんとす

◎ 骨牌の趣味 置を叩いて塵埃が飛ぶ故健康に不適當たりとか遊戯其のものが兒戯らしとか非難するものあるも前者は方法にてどうともなるべく後者は甚だ不心得な考なり人は年を経るに従ひ漸次趣味の變化を來すものなりと雖兎に角人間の壽命は娛樂の有無多少に大關係ありと云はる漸次趣味を狭め娛樂を少くすれば自ら寂寞を感じ憂鬱に流れ易く常に活氣満々として青年の意氣を失はざれば進歩あり向上あり生命も亦長く維持さるゝ譯なり土臺老成ぶるか偉らがるとかは退歩滯滯の始めなり骨牌の遊戯は第一人を敏捷ならしめ又記憶力を練らしめ自重心を養ふの益あり殊に己が記憶力の強弱を計るには好箇の試金石なり

◎ 骨牌遊の價値 経験に照すに機械的に働く人組織的な頭脳を有する人は骨牌の競争に強く理論的には一般に下手な様なり骨牌は夏には暑くて不向の遊びなれば矢張り雪中の遊戯たるべく若し分類的に己の持札を並べて一々見ずとも手自ら之を取り得る様になり専心敵の札を目掛け時々氣合をかけて敵の膽を奪ひ左右の手を飛ばして活動すれば自ら身体の運動ともなる譯なり又

◎骨牌は交際に必要 なり無意味で集會するよりも骨牌取りの名目にて多勢集合し談笑の間に互に相知るの機會を意志の疎通を計るも妙なり交際益々盛んなれば罪惡漸く減ずといふ眞に然り不徳奸佞の徒は自ら交際場裡より遠けられ知人親戚に歎せられざるなり

明治 40 年 2 月 23 日 北海タイムス

ハガキシブ 欄

▲ 此欄をかりて諸君に相談がある諸君幸に賛成して呉れ給へ正月も過ぎて少し時節おくれかは知らないが時日を定め未知の諸君と一堂に打ち集り一人前二十錢位の曾費を以て盛大なる百人一首歌かるた曾を催したし（かるた狂）

明治 40 年 2 月 25 日 北海タイムス

ハガキシブ 欄

▲ かるた狂閣下の御催しに係るかるた曾にして若し成立せんか非常に愉快の事と被存候愚生も斯道に關しては拙手の横好に候儘本曾の成立維持方法等に付充分御協議致度候へば何卒閣下の御住所は姓名御發表被下度候（かるた虫）

▲ かるた狂よ兄の計畫には大賛成に候僕も兼てより希望致所に候へば此際大に盡力致度候（○典生）

明治 42 年 1 月 8 日（金） 北海タイムス

吹寄せ 欄

▲ 札幌にて東京の如く眞に加留多が競技をする曾がないでせうかあるなら教えて戴きたい（としや生）

明治 44 年 1 月 1 日（日）

下宿の正月 北陽生

大晦日の晩、宿から馳走された一本の銚子が物足りんで、同じ思のK君を走らして外から買求めた一升の酒にさんざ酔ふて寝た揚句、故郷の夢に驚き醒むれば、世は新玉の年の元旦で、街路には早や轍の響が喧しい、前夜A君の吟じた『一家団欒○邊の親しみ、白髪の老翁往書を語る』の詩がまだ耳に残つてゐる。

………（中略）…………食後自分は先づ多〇下宿生活の實例に照らして今後休み中に執るべき一般客を考へた。一回丈け下宿屋主人主催の歌留多會を開かしむること。各室主催の歌留多會には出席するも經濟上自分は成るべく主催者たるを避くること、………（後略）………

大正2年1月10日（金）

年の始の夜

- ▲遊び足りないのはお正月▼
- ▲面白い対象ある歌留多會▼
- ▲夜の外出が多い年の始め▼

◎ 歌留多會の夜 帝劇女優 小林延子

（年の始めの遊び数々ある中に楽しく嬉しく遊び暮らす歌留多）

夜を日に継いでも遊び足りないお正月の事でございますから、名残なく經つ日數に心を止めず、お正月といひ、年の始めといふ名の下に、晝も夜もいろいろの遊戯會合が催されますが、流石に松の内も過ぎましては、朝からお正月面も出来ませんので、夜々の遊びは、心許した友達を中心にして、親戚も近隣も、寄り集まつての歌留多會が多く催されます、歌留多會も男ばかりでは殺風景で興味が少くございまして、そこへ數點の紅を加へますと、興も湧き、競技もはづんで参ります、吹くからにと読みも了りませんのに、ハアと答へて取る手の遅速に鬼をも挫かんず毛むくじやらな手が、白魚のやうに軟かに白い線手に一籌を輸せらるゝなど、それはそれは興味がございますが、それも女の手先が美しいのと、男の手先の武骨なのと對照があるからでございまして、これが女でも赭らんだけれど、ひゞや垢切だらけの手をだされましたのでは、殺風景な男ばかりと五十歩百歩でござります、そこでの方でも、歌留多會などには、手先を氣にして、天津風と讀まれても、手を出し後れることがございまして、興味は一段と減るのでござります、歌留多會などに参りますときには電燈の下や瓦斯の光を浴びますので、お化粧の色も變つて見え易いもので………（後略）………

◎ 外出の多い夜 帝劇女優 東 日出子

（晝と夜とは周囲がまるで違ふ化粧の色美く生來の美となる）

歌留多會ばかりでなく………

夜の化粧について書いている

●本社の演藝會 唯三十日午前十時
より本社工場員の發起せる演藝會は札幌亭に開かる工場の男女職工を始め事務局編輯局賣捌店等の關係者八十餘名來會、午前は加留多、家族合せ、双六などにて頗る賑ひ殊に少年男女が嬉々として打興する様若菜つむ春の野遊にも似ていとい楽しく午後は菓子蜜柑折詰酒の饗應も出で晴れの舞臺に代るゝ躍り出て、義太夫浪花節詩吟劍舞活人歌舞イオリン等勝手放題の隠し藝を演じいろは亭金生桃中軒林右門の浪花節やら幕間清孝井上半考の茶笛と落語やら氣謹々裡に散會したるは午後四時頃よりき

平凡な「かるた

児童には有害と文部省的眼光る

少年少女の五月の風物詩の一つであるカルタは年々その數が増加し、教育などは歌詞に盛りある點で各處本屋、絵本屋、玩具店に美しくならんとするがこれ等のには少年少女の教育料といふものゝ程度如何はし、ものが多うあり文部省當局の考課を受けるに至つた而して少時少女も從来の一大も歩けば一式のカルタには能立を來して滑の面白い文句の奇抜なものに手を出す結果、既成のかなためみ實行しがよいので然に小供達の純な感情を障るものとして文部省の一部で此種のかるたの販賣に止を命じようとの事が起つてゐる。

カルタ遊び

カルタのあそびも、無論徳川期のものだが、これが組織的な競技となつてきたのはやはり明治時代といはなければなるまい。

そして、カルタあそびの最も古い組織は、明治二十五六年當時の東京醫科大學生連が組織した組俱樂部及、新生俱樂部の二種であつた。

それから年々隆盛を來して、明治三十七年紀元節當日に、東京歌舞多會といふ大團體まで生れたのである。同會は、萬朝報の黒石浪音氏等の首唱によつて成つたが、當時は、各俱樂部とも選手を有して試合すること、野球、滑稽等と同様なものであつた。京阪地方におけるカルタ會流行は、明治三十七年以後といはなければならない。

卷之三

1

丁

大正二年一月七日



より同じ次第である上の句
接枝と下の句讀が大差ないもので
あることは、云ふものは一種であるといふのである。
然しそうの句讀枝と下の句讀長と
心に於て大部分の相違を察してゐる
のは、手はれぬ事である。例を取く
ば上の句讀枝大會はその根本は
枝技にあることは云々やむの、
枝としての統一でありその短長で
つたそして個人的意義がその主
になつてゐる。

は概して本道外の競技の競争に
うそれで下の句を留多競技會が思
會議場の如きも從來僅り思
じい選手がなく踏むその地方の
理所或は之に類似したく附て置
てゐた傾向があつたそれからあら
か葉来各地で下の句を留多競技
ルの如きも紙一を引いたい
的競技會もなく此ルの紙一
の如きも有耶穌無耶に歸しつ
に立つてゐるのであるが、此
考へて見れば下の句を留多競技
その點本に於て室内外競技會
に於て室内外競技會
的競技
に於て是の競技會
を競争する事は、此の
競技會の如きも根本にて誤り
接觸を離してゐたのが下の句を
競技會が抑も根本にて誤り
争したのである(や)

目次



(一) が食卓に一人一首の星原ひがは
あつたのかどうかその難文者も難文者
したことは分らないが此の古人の
首は早瀬茂氏が詠留多の

せぬ語りか要挙としてなゆてく
いと云ふ頃からあつて再び從來の
小食商人一者が我端にてはづ月から
四五月中にかけて都道府令何處でも
一の要挙として仕せる様になつた
た條断として極東の間に都道府
々に進行を附つて來た此の參照圖
の要挙は又太郎してその國々
に盤つてお歸ると黒つて來てゐる
のは又伊はれぬだらうの勿論故に
あつては
從來は各所で作者の名前
の體したむべに要挙上一定のルール
を定め斯道の統一を計つた爲に近々
從來は其外の名前から置く上字
でそれを取ると云ふのがすだれて來
た傾向があるが昔風の古文書留

作者の名前から読み上げてゐる。がないでゐるに斯うし東京を主として各地の競技大会では競上一定のルールを定めると同時に出来其の點多に依つて書名がと同時にこの書題は異つてゐる。種たしかにならうと普通一般の文理解ある位では却く理解しがたるものなり日本は大蔵集はつての競技には競争

新春趣 愛人育ての歌留多會

教訓物の疲れ易い

『さわがルタ』

今　の　事　は　ま　で　か　に　お　こ　し
が　る　だ　の　事　は　な　て　い　か　な　く　な
か　つ　だ　が　「　百　人　」　首　か　一　首　等　に
つ　づ　け　の　前　治　代　で　す　。　江　戸　時
代　は　大　體　貴　族　方　か　ら　出　て　、　あ　れ
り　町　方　で　は　出　て　か　な　が　つ　だ　が　、
明　治　に　な　る　と　共　に　大　衆　に　接　し
て　、　金　色　後　文　に　お　見　ら　れ　る　通　り　家
と　家　へ　の　間　で　お　出　て　、　世　界　の　町　で　お
つ　づ　け　の　歌　曲　を　中　心　に　し　て　歌　う　か
歌　う　か　歌　う　か　歌　う　か　歌　う　か

四月廿二日午後
晴。微風。暖。有
微雨。北風。晴。
微風。暖。有
微雨。北風。晴。
微風。暖。有
微雨。北風。晴。
微風。暖。有
微雨。北風。晴。

最近の船田の小説は、その中にもかくも、社會的問題を多く含んでゐる。その中でも、特に注目されるべきは、『少女事件の露』である。この事件は、明治時代の露骨な女優事件で、當時の社会問題として大きな話題となっていた。船田は、この事件を題材にした小説を書いた。この小説は、主人公の少女が、事件の中心に立つて、大人の男女たちと対話し、自分の心事を吐露していく物語である。船田は、この小説を通じて、女性の権利や、性別平等の問題を扱っている。また、事件の背景には、明治時代の社会構造や、政治的状況なども描かれている。



〔四〕 び遊の春

おひるはおひるはおひるはおひるはおひる
おひるはおひるはおひるはおひるはおひる
おひるはおひるはおひるはおひるはおひる
おひるはおひるはおひるはおひるはおひる
おひるはおひるはおひるはおひるはおひる

地圖

として『かるた』が日本にたら
れて一人一通はがき発行。伊勢
令名をもつ物語の中の歌が
色々に組合せられていました。

山 口 捷 子

山村年賀

詫服の外洋を手に路漫む
船橋の聲よ詫眼の聲よござれ
草に船をぬぐへる聲あ
夫はひげの剃りあと年立てり
年立ては要是手鏡に變じ給ふ

御在しの通今行はるる人
自人の作家の歌を其の腰に持て
其の歌の歌を其の腰に持て
其の腰に持て誰!!

今は百人一首にながれに立
江本朝、町方文字体の跡が
つづらうはかくタゞ今が生葉
①六八〇「火をせしと煙にあた
レ」其のゆゑに煙草の名づけ
②七五四「煙草」と云ふ。

八